梅美婦禁三編 上

特
へ遠13
841
7

遺へ13
門
號 841
巻 7

明治三六年
十月十八日
購求

春色梅美婦禰三編

近江の坂田郡筑摩より渦祭を古くよりあるを荘厳
梅賞の司り来る。梯取て渦のかくもる祭哉ト　祭
祀かなりに雲を恵まし　是を怖れ給ひ一家
嫁しる女と　枚をいとぶき二度嫁する女なれば二枚を
用ひ三度の婦人は三枚を用ひ神事の後平供すること
なりとかの男はまた特りかの女は其若しと男の数より

角にて借まゝば、ぜにもなし神はなくらゝ湯のひて、病みこと
やう形ゝ有ふ是非なく歩の如くありてわまで病れこゝろ
とくやさわぐ古人の歩遠年
ほのぐとなる紅梅の花のまつ見ぐるまん
つまこゝろ人の縁の数えむ
恨こゝろ春の白まる
実ゝの代や花ゝ湯ゝの縁ゝ

とゝ。ゝいを恭ゝ世知ゝ悲しき男女の是の巧まし
いひゝゝる憂ゝ恋ゝ有ゝ浮ゝ世ゝ是ゝ情ゝ
有ゝ春の糸ゝ春れゝの書ゝ形ゝ
孔子ゝ同ゝ道ゝ形ゝ
でゝ鑑ゝ異ゝ
身ゝ芸ゝ湯ゝ風ゝ濱ゝ言ゝ
ゝ也ゝ文ゝ中ゝふゝ

うぐひす鳴ふ美人の花の人情をむすぶと
なちよ吉〳〵まる尚の〳〵なる〳〵も〳〵なる〳〵んと部屋の代
いとかま連る倩の子の庵癒よ一日むる〳〵
面の陰を。ほ〳〵ものつ〳〵て吉〳〵のうち

吉原一庵

東都

吉原庵

料理通の丸之
姫東松前の
山ヤホリ
清元延津賀作

重古

春

[illegible]こそ年ゝ[illegible]梅ゝ和　青庵
[illegible]七[illegible]梅ゝ和　雪庵
[illegible]梅ゝ和　玉枝
[illegible]梅ゝ和　梅雪庵
[illegible]梅ゝ和　柳雅
[illegible]梅臭和　松壇
[illegible]　吹雪葉

春色梅美婦禰巻之七　梅園英對の拾遺

江戸　烏亦春水著

第十三回

変菓[illegible]の蛇を[illegible]ましげて判[illegible]の門[illegible]を這入る[illegible]者　[illegible]八判[illegible]お[illegible]ざまエト言[illegible]
[illegible]水[illegible]川で[illegible]の[illegible]判[illegible]八
中[illegible]居の[illegible]まを[illegible]けて判ゝヤ米八ざんろサア
此方へおあがりな　米ゝアイ　お[illegible]ゝ[illegible]

うちふ　ちつぐる　判へて　様うサ　宮ふ　淋しく　入りてゐて
やせん　時ふ　大分　早く　お出でけど　いつて　お富さまの
帰りごま　米へ　ヲヤ　さん　ゐふ　ちやうて　めつてゐる　せんぜ　宮早
年時ハ　余ぢ　さぎ　まつてョ　お茶　さん　いどふ　ゐつて　お茶
ゐてゐる　工　判へ　工　宮早　さん　ゐる　ゐる　さつ　ちやて　今　紀
や　し　米へ　今紀　さじ　ちやて　めつて　ます　せんョ。工　判さん
お茶　さんも　めん　まつて　ゐつて　お仕　ちやて　ゐる　ゐョ　私も
丹　さんで　覚へて　ゐる　ゐ　媚女が　初　門　て　お茶　さんを

自宅の　ゐふ　やつふ　して　変ゐ　ゐる　ゐる　ゐて　並大体　ゐつ
ちやて　めつて　ます　せんぜ　文　ふ　お茶　さん　ゐ　ふ　ゐ　ら　ふ　ゐを
ゐる　門　ちやて　めん　まつて　媚女が　可愛　さつ　ゐョ　私が
さん　ゐ　異見　ゐま　ふ　ふ　ゐを　ゐふと　可笑　けど　ゐも　自
分で　苦労　して　覚へて　ゐる　ゐて　ます　ゐ　ゐ　ゐも　同様　ふ
男　門　て　居る　男　を　ゐ　放　して　寄宅　して　居る　ゐ　ハ　ま
ふ　ゐ　ゐが　ふ　ゐ　ゐ　ん　ゐ　ゐて　ます　せんョ　お茶　さん　ゐ　ゐて
媚女の　ゐ　ゐ　ゐ　て　ゐ　て　お見　ゐ　ふ　ゐと　身　ふ　入　ま　ふ

米八が異見の言葉ふ判決第八不審されば行で
稍考べし考へて居ようしば判ハ米八さんお茶あろ
まる変を言ようが何様も私めやう不分解ぜ
ねうく此身がなんぞ深もでも考と思りて言ひま
きるのまま米ハアレサ実似でないョあっも私が見
届けさうふサそもおいの仕の変なふ仕方もないがる
娼女の腹をづる居様をお致しやう析角さの
まれて居る私が娼女ふまるなひうふ何所までも
娼女ふありうふて情まれ何を利なんうちやう
なふ。どふぞ判まんめまり野暮なはぎけれども
世話をやうせないやうふしてお器なまるナ判コウ米
八さんお茶が見届さと言ふうふやうまんざら
種のねく変でもありやうんが何所で私が何様
きさのゴトトおし腹を立し思入まふそりの米アレ
お茶さん腹をおこじやう悪いいま私きやうんの
係わづくでお話をまるのの暫く腹なんぞをお立

ぢやア　仏様も　話法が　落合ふいる　判へ　十二時を
言へ　仕やせん　けまども　男とも　分わく　こを　言れさ
うふ　ツイ　米へ　イエ　思ひも　分るいこと　言ふまをョ　笑う
あ言ふまう　言まぢが　今　私が　晴ふ　遠家うふ
ぢと　十七八の　実情ふ　可愛らしふ　娘ハ　めうやア
お婆さんの　仏様　判へ　アハハハ　アノ　娘の　夏を　ふうう
言ふのう　人ハハハ　米へ　アレサ　知りてたうり　居やア
ふ　分解ョ　判へ　ヒ　ゆうう　僕ふ　裏ふ　居る　ゆ　ゆ

米へ　そまぢが　ぶふして　来こ　のぢエ　判へ　ゆま　湯の　浮ぶこと
言りて　ちとうと　寄りて　行ふこ　のョ　米へ　ヲヤ　そまふ　行風
あんまふまぢが　んで　眼の　ふちを　めうくして　居ふのぢ
わア　判へ　エ　米へ　お頂しぢ　ふいョ　そうやア　お茶さんダ
斯う　やうて　物臭で　あそる　うふよ　お茶を　飲く
ふて　女小娘ふ　お附合ぢやア　見非　左様ふ　ふ　ふ
言理　ふいョ　そうやア　お茶さんの　方ぢやア　ふう
ふく　お仕でも　婦人の　方で　やうう　殺ちやア

亜墨利加 ゆるす まで お茶もんの 公ひろう で
解くみ 仕て あい〳〵ゆて お亜墨利加のと又きく人
脱 脱込のとく 気の〳〵亜墨所 ひろうでありまぢぞお前
もんが 何所までも 婦女が 苦労を 仕まるのを
可哀 おる 支ごと 男門て お主まれば 他女がもんと
言門ても 甚方へ 公の 向くもんでもう〳〵ようんど
義理づくで 結うのく ゆけみ おまうでも そうもや 當
座の おゆで 深く 彩うと のく 訳くする 市ちゃ

あり まれ まく と 私 まわ 男 まれョ 何も 彼も
彩 屋のて お主 まるか お茶 とんみ もんな 支 言ふ
のく 知ごと 支を のく 拝で 大きみ お世話ごと お男ひ
まもらく けまども おまも 婦女と お茶もんのを
おまふ うふの うて あり まく うふ 悪く おまく まひで
お呉ん まとヨト 深実 言酒み あふまて 彩屋う
る 米八が 異見も まず 別婦女 意も 結も 知り
ねいと 辰巳 風女と 知まけ まれも 判決 帝ふ

あげ人うきき臭の寝衣とハおりゑ人ども　ゑりまで四つひ
きハめ〜米八今言解くとも実情とせず　析とそ
あふあと紙をさぐる　判へ行時よろろ〜ねへお茶の
深切　かんか親臭も　あるびやせん　猫　けうあハをを
用ひてお茶や代来の　深切を　ゑふ　仕ねへ　猫の仕
せうト　ゆうて米八も　紙屋屋て　米へ　ゑうあるりて
お茶ん　ゑと　つまや　私も　言甲斐がめりてどんな
あろ　猫〜ハョト言ゑうがら　嘘ようう　一通の　手紙と　一

色の金を　出〜て　米へ　おまハ　けうる　娼女ろう　お茶ゑんあ　金
ゑふ〜て　ゑろと　ゑきし　ゑるのてありまハョ　ゑ〜て　ゑト
言ゑうがら　四湯を　見まハ〜て　判　次郎の　耳へ　ゑを　寄せて
ゑろ　私　語　米へ　ゑ　ゑうろう　ゑう　沢も　ありまハ　ゑう　今　ゑ
でも　ちょろと　仕ゑて　あるあげ　ゑまハョ　ゑて　今の　沢ハ
手紙　ゑも　ゑ　細〜く　書てありまハ　ゑ　ゑれでも
ちょろと　顔を　見せて　おあげ　ゑまハョ　判へ　ムウ　ゑ
ゑや　今　ゑ　ゑも　ちょろと　遊ゑて　お茶の　実意も

たすけて恍惚ざをやしやう　米〳〵どふぞ左様して
わげてゐるんなさるんドレ宅う　私きやア　行きまるヨ
大きい　おやうまし〳〵　判〳〵アレサまア　紙八ナ今茶を
あつらへまること　米〳〵左様しちやア　居まるまま
せんヨ　地門の宮戸川の　お客と茶台さうんと
めへ　奥女房が　待ちて　居まるうち　判〳〵エもましやア
お客先　くつ　まさのうちエ　米〳〵て　お客が　待ちて　笑
つて　まさのでありまるヨ　晴雪　とふものハ　余程

可愛　ものざるエ　本〳〵　判〳〵　遠へね　アつ〳〵　米〳〵ヲヤ
私　きやア　さんな　乳　楽る　支だらう　言ひて　居ても
きなる　なんと　ままじやア　まるうまるヨ　異ぐも　今言ふ
通り　深　乳　ハ　ぐ　用ぐ　判〳〵大丈夫サ　米〳〵あてふ
なふ　なん　大丈夫ヨ　左様　晩　あはきると　北廓エ
ト　二百　捨て　呼び　呼び　呼びて　判〳〵米八さん　丈夫
よろ〳〵ヨ　米〳〵ヲヤ　丈夫ふエ　判〳〵アレサ　丹さんの
支ヂナ　米〳〵　攘　しのふエ　なやく　答うりさいとサ

ト笑ひながら出て行く跡見おくりて判次郎
溜息をホッと吐いて独言　判八アめの嬢も涙切
者ゴノウ　俺今見へ行くとおもふてうろうろ
京を深気でもして居る様子言ふけらまてトのふ
拵らう裏口より　まへ　俺お茶さん外出ずお悪うご
らうよト言ふ　判次郎の側へ居る　判八アも
帰しとお茶　先刻ら　めまふ居さのう　あへくよう
きらうのお話法へ　うんなめきあで　国まーうづる

判さんお茶さんハ行とお国ひなくうろうろ
茶八ぎんがお言ひのみやア　お茶さんと　私と深気でも
居て居る　様よおすりて　お夫ぶやアあります　判左
様ョとんざうさぶを清て　お茶のあんも気の毒ぶ
あへイエ　私きやア　嬉しゑ　ざざるまふく　判左まへ
お茶さんハ泉ぶるひのおるわど　お茶ごらうぶる
茶八ぎんのわく　男うまて　お見まこの　家早ろうく
ちへありません　左様して見ると　仕ま　ちゃん

変で他人のやうにまるでそのくせに実
正体なく引て行くんまるのナ形ふうちはけの
女のやうに言ふわどうよ〳〵男ひばるこの上可
笑根ごと男ひ方どうぞつまらぬこの仕方今て
見て居るんあるくト男ひつあるる腹立みたいか
まさきとも手に言ふもふのようけとぞ思はける
振り見るやうに眼ふ
かすびしやもう柳

第十四回

ふるふ赤峯次郎ふ青森より鎌倉ふ帰りて後も兎角
病気を言ふて別荘ふのみ在けるが父の病気の知らせの
使と偶ふ本宅ふのりて看病し居る中お京の父が在中
まで出て病気の中を知らせけるば捨置がたく俄ふ旅の
支度をして の 抱への者の者二人と多代を伴ひて
路をいそぎ廿四日の夜ハ奥州白河の山方なる白坂
とふ所ふ止宿し青森の伯父の途中より先へ登せ

多紙の紙と遠の日数とを多く袋宿は遅留して居る
様よ思うれば何こやらん案じられて峯は連て来し
人々の内へ峯「エコラ茂助此様なる者
小家人八様ご者
きまで遠ひの来て伯父さんの逢るひ様でハ
なかろうと但し何ぞ故障が出来たるこのふこけどらふう
茂「答でおざるませうろう「エモシ若旦那眠ル此宿
袋宿の傳ゴヤ途中で月を送ぶ
左様ア何でも彼傳の盗人の様な奴が道中を居合
出来ません「ゼン「峯「エ「「様よ若旦那の
蔵見が毎晩魚いと汐作うう何ごろ
「「明方の暗中ゴ
いこませうどゴヤ
くて四逆恐ごらうう私ども
様小こるい様ゴヤ帰りて大旦那の前へ解ごど
ぜんません何でも明方の暗ゴ盗賊を追
治うりで出ケやせう「大分強勢なものといふがそ

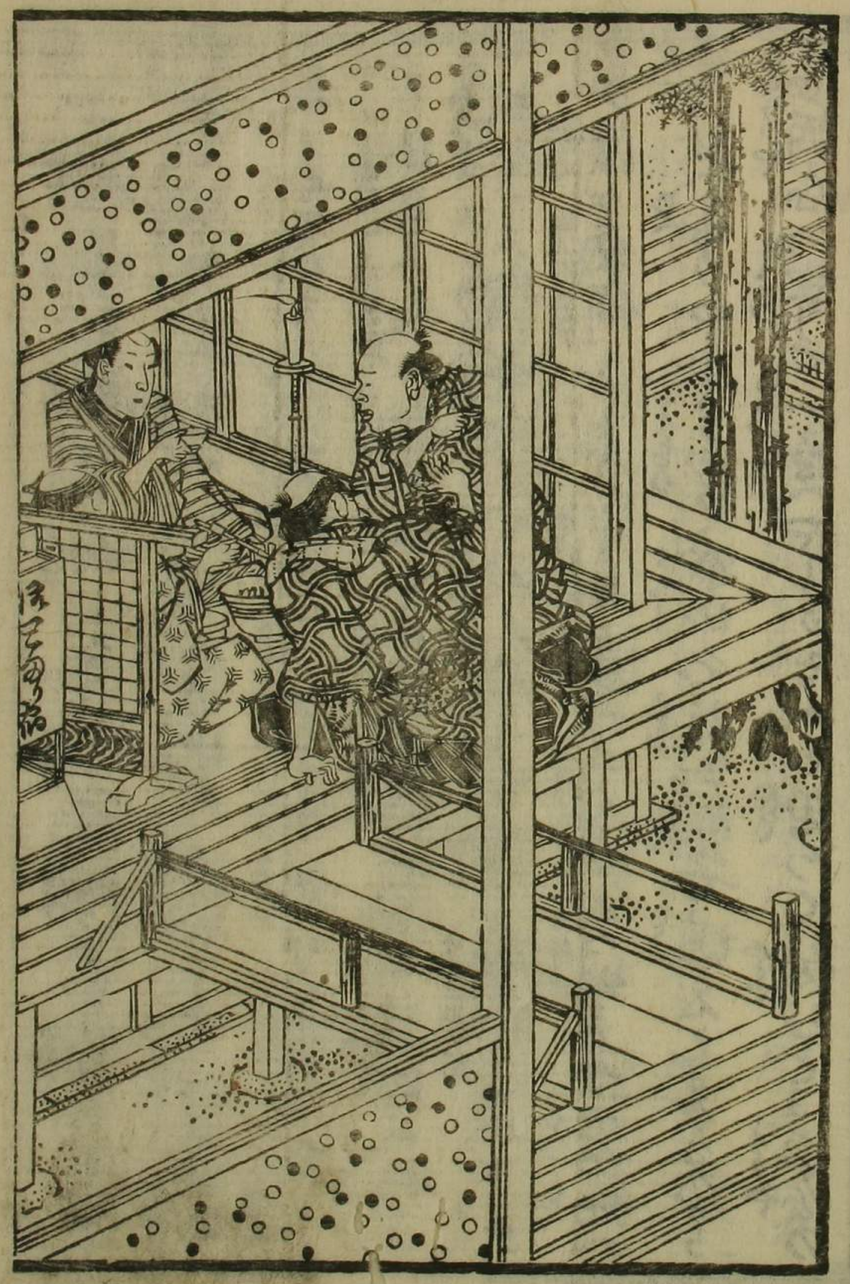
陰へ行て逃出しちやア行ませぬ×「そうかへさら小三次さん
ぞうか夢にも逃さと覚へハござんせんネ▲「イヤ逃るへと言
つまらへぜト云ふ所へ兼て誂へる酒肴が来りしゆゑ
小三次弟ハ笑ひながら気人に酒を呑せ早「此お早く
起たらつてもまさ初更にハならずあまざらうゆゑと呑で
寝のが能じやあるめへか×「ちく一終夜くるゑ寝まくる
ても▲「呑方が能かろうノハ～～×「ヨヤ小三次さんが逃さ出しつ
今出かけ何処の喧嘩の時に逃さノウ×「ナニく

茂助さん金主ハ捨次郎が出方頭で立派な座まつぞ
うかまへ逃るまんざき金持な比良な私じやアござせん
ませんよ●「金主でも今捨さんが證人で逃さと見ら
あのウ～～～～×「ヤイ捨次郎が此身が何時逃さすらが
ある何程友達の言事でも小三次が逃さと言ちや
業知しねへサア逃さ證古を出しく言ナ▲「アハゝゝ金持に
立腹なら何でも稽やア金方ハ逃さのを言てゐる然も
此身と金方と金出に逃出して金主旬に身知交て

法の面をして深のりさるのぶめるぜ　〆「嘘を仕まるもんきまるの
逃げても仕さらふぶ仕鼻やア逃さ覚へく仕さもねへぞんぜて
深さうんぞと邪分の悪ひ何時仕鼻が誰人が落ろ
サア　きっと人を言て聞せヤ若旦那の為でキ様をのゆせられ
ちやア明盗を主ねへぢやア金兵衛ふねへ　▲「キ様ふまろ
逃げ出して　掘りさるのを言ふ　峯「ハ〳〵支ぢやア小三ヤキ
方ハ逃さが遠へねへ　〆「ナアニキ様る覚ハゆーもぜへ
ません　捨ぶ　仮言て　矢ぱ屋まさアナ　▲「ア〳〵泳く逃さ

真を言ふト矣ひるぶぶ　峯次郎ふむろい　▲「エモン若旦那
お関係成て矣ます　小三ヤ　此さ一件ふ
那ぢぜへ　まだ久しひ以来ふ　私も小三も親父の為
仕損てお生のる銚子の方へ漂迫まろて探びふかて
居さるのぶぜへ　〆「ナンノ竹房め夫ハ古ひる
カア　▲「古くろても逃さが遠へねへヤア　茂「ろく小三さんが
撞ふぶふ若旦那と私が他しておまる成　〆「茂助さんが
他人のるとのふと根を掘て聞さるのぶ悪ひ癖ざへ

岸次郎伯父の
嘆きて白髮
泊り客



峯「アヲ」藤つぼみ　捨あるこ松　小三「酒でも呑ぶいてサア
此臭が砂をして峯の「ドレ」その中の　逃出しこ一件をあ松
らふしやちやう　「東西く」　「アヽ」　初のふつけサヨ　伽
でも小三と　私が銚子　中を拵び　歩行て　その日暮の銚子
の奴等と　宣嘩をして　二人だろうを　淡くお擲　このサ夫
らふ　渡が面倒　ぶらふ　二日　直ぐ　二人で　矢出して　空地へ
浮りて　寄りやしこ　ゐが　途中で　腹が　空て　堪えられまこのひら
居酒屋へ　寄て　一盃やらうそよと　思つて　休ひとる　酒屋の

其一人が　私と　小三次を　憤て　お前方い　日中　銚子の　四
郎　狂方の　子分と　喧嘩して　立退のしやう　わしゝ方一
人　ある　べ　早く　一盃　呑んで　逃なせ　人　今も　来さ　人の　ものと
きけば　お方を　追かけて　お　新さと　いろて　大勢　来さと　集
めて　追かけて　来るゝ　言うゝ　小三も　私も　青くなり　中ゝ
旅の　ものゝ　此方ハ　二人の　外に　味方ハ　ちゝ　向ハ　所の
揚屋と　知つて　奴等ぐ　大勢　来さ　日ハ　叶ハぬ　ゝ
夜通し　逃て　帰らうと　おもしして　酒と　呑で　居ると　宗よ

追来て来るこゝろ風情さま夫〳〵おおさん酒の代を拂
つゝこゝ処を出ようとまるゝと酒屋で言ふハ老も高声に
逃さ時ハ少ア進ずゝ追分ふ行逃ゝ〳〵さて藪城
ふ二所だり行たりの方の松林をぬけて行ゝ〳〵
かゝりて来ろ方振すゝ進ずゝ追分ふのハ行ゝ〳〵
ふいその不中へ行〳〵振が出ゝ〳〵用心〳〵と藪人中へ
義イヤモアヤア大事ざ筆「お御方と逃ゝ追ゝふ振
巻まるゞゝ〳〵困道人かゝゝ振ゞ居ゝと〳〵〳〵死車

乗り大子と金ゝのゞアゝ義「ゝろとまゝしやア泣のも
ゝ義ハ〳〵ゝ十二泣やアゝ仕やせんゞゝ正車ハ元保ゞ義
ゝろのサゝ義「アゝ〳〵実ゞゝ筆「そゝゝ行振〳〵
その義城ふ逃さの〈行振も論方ゞどゞハません仕
来て逃ゝ長振ゞ。大勢ゞ追ゝ〳〵居ゝ
通ゝ和ハゝゝ藪の中と二ゝ所ゝ欠ゝ
杉の林と藪〳〵向ゝ出ゝと居〳〵野ゝ人出中〳〵義
すると完早用ゞ書ゝ月ゞ〳〵〳〵と日中の振で逃ゝ

あるく
寄り合い雑が淋しくなりて何所ともなく小物をさがしあるく
何でも時いそがしそうなる女サマ達小さい子ばかり赤ん坊
あるく×「ヨウく」喧ましと成言あへ子者ども共人
を引て ふらく ふらく ふるへ通ばかり 代者が 背後小跟て来とゞやア
教人ゝ 「イエモシ」そもそもうく大事ゆへ 漸くこゝ茶屋二里
ばかも来ると左右小細い路あり 人の捷い所へかゝる
と左りの方の表の外路より 猫が ちらと二疋出て 居るとゝ
中ゝ 毫小ゝも私も途中へ まぐく ふるへ 互小

彩紙足合せて 暫時 言て 居中ゝ 小ゝが言ふやア 猫
といふものゝ義公ゝ中ゝが 法くゝて 使者乳なるものゝ 居理を
読て 彩あび 出りけて 居るとゝ 猫小 出ると 動て も
背後の方へ 帰られるの ゝ 猫小 猫まつて 通らうと 者
極めて 出ゝ 帰ゝ ゝ 私と 小ゝと 両方が 逃迯を 仕ない
相ゝ 引合て 猫の 居る 二ゝ 居 多 の所まで 行て 居
所が 月の 光りと 猫の 眼の 光りで 識 者 ゝ 猫と
恐小 冷汗 出ると 思ひ ゝ ゝ 二人 まぐく 言 所へ 多紙

文て小三ガ中まで〳〵ゑへて。ヲヲ猿さ公ハ小ヲ形へがとさこまを
私ども〻宅ハ小祝の病気で夜通しハ宅へ帰る者でこざい
ますを何卒お見退し　辻成て氏ハも通し　辻下まし
定めてあるとのお在あるあと以前ハ接拶もせず
通るとは立腹でこざいませうが何卒　祝番ハの所ハ
免しで　辻成ハと頼ひまして　イヤ物るものを
猿ガ皮ヲ付と辻ヲ為て　辻成と　辻ハ　辻ハ　辻ハ
動ハ居〳〵ヤレ嬉しやと猿のあと腰と屈めうぐう

通りかゝて行く貴と石の約物ガ森の入口ハ並べて
在て森の中ハ何のゝお宮ガあります　このサ　峯〳〵〳〵〳〵
能落し　哭しご立流る使客の二人ガ石の言麗物ハ並べて
支て　猿ハ中ハ可笑アハ〳〵〳〵〳〵　茂〳〵〳〵〳〵　小三さんの逃る
形を見ところナア　イヤ彼時の猿ハ弱ハ
こハ〳〵〳〵〳〵ト　ヲヲ笑ひ　紹合ひしガ　手ハ所ハ　休ハ
明朝ハ　寅刻ハ　起て　白河の　宿人　急ぐ　ハ　彼青
森の　伯父ハ　白河を　発ハ立ハ　白坂の　方ハ　来る　途中

盗賊ハ出合既ハ親義の家中 峯次郎が逆ひ行合せ
さまたぐ吾妻の使客の乳性 小三次 捨ふ郎ぐ 働きあて盗
人どもを追散〳〵 伯父を殺ひつぐ奪 鎌倉へ伴ふハ
帰りける

まゝハ盗賊を殺ハが本文ゆゑ べきを略して ちるさば
藤宿の離淡をうりて峯次郎 藤行の前文の
行ハ備ふ人則ち人情本の用ゆるうゝ
春色梅美婦祢巻之七了